

シェーラーに於ける

「人格の情緒的存在構造」に就いて

— ordo amoris —

深 谷 昭 三

一

カントの倫理的先驗主義に對してはそれに固有で豊かな内容を、逆にニイーチエの價值意識に對しては人間の評價の只中にあつて不變絕對的内容の確實性を再び與へる事によつて、シェーラーは倫理學的、絕對主義を樹立せんと試みたのである。従つて彼の倫理學を全體的に記述してみれば三つの根本的性格を持つてゐる。即ち、價值性質の實質的にして先天的な主張、更にそれらを具現する主體としての人格概念の特徴ある論述、最後に兩者の決定的關係を原本的內的に統一構成する情緒の特に愛憎の先天的志向性の考察と、之を通しての新しい人格主義の確立とがそれである。而もこの新しい人格主義の試みに於てこそ一見異質的な矛盾したものを力動的に結合統一せしめる力、換言すれば愛の根本義を深くも認めえたと言へるのであつて、正にこの點に彼の劇期的洞察が秘められてゐるのであり、カントに於て事柄の本質を形成した先驗主義の特色ある完成に外ならなかつたとも言ひうるのではなからうか。換言すれば彼は人間生命の根源的全體的存在表現としての愛の行に倫理的絕對主義の根據を求めんとしたのである。吾々は科學の領域に止どまつて善惡の實質的ではあるが先天的性格を看過してはならない。そこには道德的飛躍 *moralische*

シェーラーに於ける「人格の情緒的存在構造」に就いて

Aufschwung^(註a) がなくてはならないのである。シェーラーの倫理學はこの意味に於て「有限なる人間人格の核心が凡べての可能的事物の本質に……直接的には他我人格の核心に……愛に基づけられつゝ參與する作用の學問である^(註b)」と規定しようと思ふのである。

扱て、シェーラーの實質的價值倫理學は價值の問題を價值判斷に歸屬せしめんとするカントの倫理主義^(註c)や、價值が心理主觀の事實的感情や欲望への因果關係に於て見出されるとするマイノング、エーレンフェルス等々の心理主義的傾向^(註d)に對して價值性質そのものの客觀性を強調すると共に、價值そのものは我々の感情や欲望の事實とは全く無關係に存しうるとするコルネリウス、クリューガー等々の自然主義的模寫說^(註e)に對しては價值の明證を鋭く展開する事によつて獨自な價值論を樹立せんとするのである。この價值論の根柢にあるものこそ情緒的なもの自身内に包む先天的志向性でなくてはならない。従つて私の課題は價值性質及びその體系を直接實現具體化する作用^(註f)そのものとしてのこの愛の先天的志向性を主體としての人格並びに人間の諸種な存在様態との關係に於て、結局一言で盡せば人格の情緒的存在様態及び構造を徹底的に考察批判する事に於てシェーラーの所謂實質的價值倫理學を超越し、人間存在の根源的在り方を解決する一つの試みを提出せんとするにある。

二

そこで先づ問題となるのは人間の情緒生活全體の本質的考察でなくてはならない。シェーラーはパスカルの心情の秩序を力強く復活せしめんとする^(註g)。即ち、一見混沌模稜漠として把へ難く錯綜紛糾し合つて暫くも止まる事の無いと考へられる感情や情緒の問題を、その底に深くも秘められた自我と感情一般との層位及び深さとの秩序關係を明晰に把握し、個々具體的な感情々緒の各、正しき位置序列を價值論的に定位づける事に依つて心情生活全體の本質構造を明白なものとなし、そこにアプリアリの合法則性を發見せんとシェーラーは企てるのである。

プレンタノの愛憎は對象に於ける正・不正の價值及び反價值を是認し拒否する自我の態度であつた如く、シェーラーの言ふ感情々緒の凡べても當然自我と結びついて現はれるものではあるが、彼はこの自我を存在的に「肉體的ク、生命的ク、心的ク、精神的ク」と言ふ四層位に區別し當然悉くの感情々緒を、感覺感情群、生命感情群、純粹心的感情群、精神的感情群として特色づけてゐる。^{(註(3))} 感覺感情とは我々の肉體的部分々々の感覺内容に直接隨伴して生ずる最も低次の感情であつて感覺價值を志向し、生命感情とは統一的全體としての身體或は身的生命の狀態を報ずる感情として生命價值を志向する。更に純粹心的感情とは身體一般の狀態から獨立な只心的自我の諸活動又は狀態に應じて現はれる感情の總稱であつて當然心的文化價值を志向し、最後の精神的感情とは自我の中核たる人格そのものから發する最も深く根源的で同時に包括的な感情として最高の人格價值を先天的に志向すると述べられてゐる。然しこゝで彼はこの心情全體を支配する自我のアプリオリな直觀的本質構造の分析を統一的に解決してゐるとは言へない。即ち、それら各々の領域は自身存在、異質性を内に含むものであり各領域相互の關係は全く否定され分離されてゐるのであつて、『同情の本質と諸形式』の中で企てられた相互の基礎づけ關係も僅かに領域的先天性を個々に秩序づけてゐるに止どまつて具體的な人間情緒の躍動的姿は問題の背後に押し隠されてしまつてゐる。^{(註(4))} シェーラーがかゝる先天的感情々緒の分析を固執する限り各情緒の領域間に於ける相互媒介的限定といふ人間感情の本來的在り方は否定され抽象化され、性質と次元を異にした靜的秩序の記述のみが整然と残されるに過ぎない。従つてそこには諸情緒の相互交叉の結果とも稱される意志決定の獨占を求める緊張した力の闘争關係は全く無視されてしまひ、當然情緒一般の先天的志向性として強調されてきた價值の明證も單に若干の所謂價值の公理が抽象的に提示されると言ふ以上には出ないのであつて、人間の全體性は永遠に解明されぬ儘に終つてしまふ外ないのである。だが然しこの根本的缺陷をシェーラーに於ける人格愛の思想を批判する事に依つて以下統一的に解決しようと思ふのである。

三

シェーラーの事實的價值には情緒一般が對應する。然し諸價值間に於ける二ツの價值性質の認識は價值優劣感、*vorziehen und Nachziehen* が之を支へるが、凡べての價值間に於ける絶對的高低を直接とらへ、或は唯一の價值の中に無限の高低を生みゆきうるものは正に愛憎の特異な情緒作用に外ならない。愛はこの意味で價值認識作用に於て先驅者指導者とも呼ばれてゐるのである。^(註一)

而も愛とは感情の結合集成により構成されるものではなくして、全く逆に自からの中に凡ゆる諸感情を生み出し模倣づける無限に豊富な心情全體の不可思議な源なのである。ニグレンも指摘する如く愛の原本的姿はこの様に自發的なものであり無動機的なものであり底なきものであつて、^(註二) かの無底の底としての内的生命の深みより躍動したる純粹な作用性としてのみ把握されうるであらう。マールブランシュの愛は尊敬であつて愛ではなく、カントの如く愛を單純に人間道德の領域から閉め出す事も當然不當であると言ふ事が出来るであらう。何故なら愛は一方實踐理性以下であると同時に他方實踐理性以上なのであつて、單に愛の一面性のみを問題とするに止まつて人間關係の窮極の深みへの追求を避ける事は許されないからである。

扱て、私は此處で愛と同情との本質的異質性に一瞥を與へなければならぬ。根本的に言つてみれば同情は相手の體驗を唯共感する、*mitfühlen* のみであり價值性質に對して盲目的な單なる心的機能 *Funktion* であつて必然對象に規定されて生起するのであるが、これに反し愛は何處迄も價值性質と本質的に結びついてゐるのであつて自我の中樞部たる人格層に發する作用 *Akt* として全く自發的に生まれ起るのである。従つて愛が同情を基礎づけてゐるのであつてその逆は誤謬である。^(註三)

かくして愛の本質をシェーラーは「對象に於て與へられてゐる價值Aからして、そのより高い價值Bの現象がそ

れによつて初めて實現される、Erscheinen に至る様な志向的運動である^(註c)と規定する。換言すれば愛とは人格核心の根源的價值上昇運動そのものであり、その中にこそやがて價值は現はれてくると言ふ意味なのではなからうか。これに對して憎とは當然對象に於けるより高い價值からそのより低い價值へ下降する様な志向運動であると規定されてゐる。^(註d)然しシェーラーに於て憎とは反對の活動としての愛としてやがては愛の翼に解消してしまふのであつて單なるプリバチオの領域を越へる事は出来なかつた。憎が具體的な眞の憎たる爲には何處迄も愛に對する憎として強烈に價值の體系を否定する人間の情緒的志向運動でなくてはならない。憎は積極的に愛の秩序を毀損するのである。かくしてのみ人格存在としての吾々は全體の意味で優れた人格たりうるのである。人格愛の問題もかゝる憎を無視する限りその論述は必然空虚なものとならざるを得ないと思ふのである。

兎に角愛が單純に愛一般として考察される場合には一ケの砂粒から神に至る凡ゆる可能的對象に對して遂行さるべき人間存在の全體的な情緒作用の志向的表現であると言はるべきであらうが、^(註e)それにも拘らず眞なる愛とは直接人格そのものの核心に向ふ人間の道德的飛躍の中にのみ發見されるのではなからうか。と言ふのはシェーラーに於て愛の運動とは一方人格そのものから發する優れて人格的な情緒的志向作用であると同時に、他方この愛の運動こそが最高の人格價值を創造し且つ人格存在を開示すると言ふ全くの二重性を内に宿してゐると言はねばならないからである。この意味ではヘーゲルと共に愛は驚くべき矛盾であると言ふ事が出来るのであつて、^(註f)シェーラーの主張する愛に於ては價值が人格に逆に人格が價值になりうると言へるのではないであらうか。この人格愛こそはそれ故にクラエンツリン G. Kraenzlin が指摘してゐる如く現象學的統一帶、phänomenologische Einheitband と換言されて然るべきであらう。かくしてシェーラーは先天的にして誤まりなき『愛と憎との法則を發見する事に於て凡べての倫理學は完結するのである』^(註g)と力強く斷言する意味が明かとなるのではなからうか。

四

カントの尊嚴な人格概念と實踐理性の普遍的自己立法と言ふ思想を鋭く批判したシェーラー自身の主張する人格概念とは果して如何なるものであらうか。これがこの章に於ける問題でなくてはならない。

シェーラーに於て人格とは眞に直接共體驗さるべき體驗の統一體そのものであり、既にその中に含まれてそれらの本質から離す事のできない存在統一を構成してゐるものとして、純粋にそれ自身個體的存在者であると言はれねばならない。彼に於て人格とはかくの如く各個人の最内奥にひそむ作用中心體或ひは諸作用の遂行者又は諸作用の秩序組織體として、志向作用の遂行に於てのみ存在しうる相互に全く異つた完全な個體者なるが故に本性上對象たりえないものと言はれてゐるのである。^(註1)従つてかゝる人格とは決してスコラ的な實體存在などではなくして、何處迄も諸作用の質的同一としてのみ自己同一を保つ現象學的存在なのである。一言で盡せば現象學的統一形式、*phänomenologische Einheitform*と考へらるべきであらう。故にまづシェーラーの意味する人格とは單に論理的主体況や先驗的統覺の自我或ひは意識一般でもなければ、勿論心理的或ひは生理的自我とも截然と區別さるべきものである。^(註2)

更にシェーラーの人格には特に世界、*Welt*が對應する。^(註3)この世界とは根本的に言つて心的たると物的たるとを問はず悉くの對象界を包含してゐる小宇宙^{ミクロコスモス}として、各々の人格が具體的個體人格として異なる丈異つたモナド的な志向對象の領域を形成してゐるのである。それはハルトマンの批判する如く先驗主義的圖式の代役を務める先驗的人格主義の單なる圖式なもので、従つて人格に對して、論理的に構成される抽象世界でもなくして、人格そのものの志向的實踐世界なのであり、トーマスの指摘した如く人格の眞實を創造しゆく唯一の母胎と呼んで然るべきであらう。こゝに自我或ひは意識一般とは嚴密に區別されたシェーラーの獨自な人格の意味が彫塑的に語られてゐるのであつて、人格は自からの實踐を通して絶對的な世界に直面し、人格的眞實を創造する事に於て存在を價値に、價値を存在に媒介し

うるのではないであらうか。

最後に彼は人間の人間たる所以を精神又は理性或ひは人格と言ふ獨自な作用性に求めんとしてゐる。然しこゝでもシェーラーは和辻氏の批判とは違つて人間を思惟能力者・理性的存在者たる以上に人格的存在として考察してゐると私は思ふのである。そこには人格としての人間——シェーラーの言葉によれば生命の禁欲者、現實在の否定者——のみが有機的生命への依存状態を脱し、自然因果性を超出して自由となりうる純作用者たる事が隠されてゐるのである。一言で盡せば人間は人格存在として自からの凡べてを賭して自證する人格的直観、その最も中心的な愛によつて可能的對象を正しく言ひ當てる事の中に初めて眞の人間となるのである。『遺稿集』の中にも述べられてゐる如く永遠なる愛に導びかれつゝ無限の人格としての神、愛の王國に至らんとする人間存在の全體的自己表現を彼はこゝでも問題としてゐるのである。

然しこの様な人格概念の分析が個々別々に考察される場合には、既に情緒一般の秩序關係を批判した際に明白であつたと同様に抽象的な領域的存在論に陥る外道はないであらう。だが私が展開せんとしてゐる様に、これらの各々が特殊な存在状態として夫々獨自な意味と役割を有しつゝ相互媒介的に人間存在の最も根源の様態としての全體表現たるかの人格の愛の情緒の志向作用に統合されて生かされるならば、シェーラーの新しい人格主義は絢爛たる花を咲かしうると言ふ事が可能であらう。實際シェーラーの本質世界への唯一の通路は、單に存在論的なものでも論理的なものでもなく凡べてを内に含んでそれらを生かす人格愛の情緒的な先天的志向運動に求められねばならない。

五

こゝで上述したシェーラーの純粹な作用統一體としての個體人格相互の關係は如何に考へらるべきであらうか。この解答を私は人格への愛と言ふ思想を描くことによつて統一的に遂行しなければならぬ。

シェーラーに於て人格を愛するとは絶対に對象化されない個體人格そのものの作用中心から發する諸作用行爲を自らも共に後で、或ひは先んじて、共遂行 *Mitvollzug* し、以て他我人格の諸作用行爲に隨從する外にはあり得ない^註。それは何處迄も肉體的・生命的・心的存在構造の層位や特質に無關係な他我人格の諸作用に直接參與する最も深い人間人格の全體的存在表現として絶対愛とも稱されてゐるのである。神を神として愛する事がベリサイ主義と言はれる如く、人格を人格として愛する事も同様ベリサイ主義に他ならない。こゝに隣人愛や遠人愛、更には人格を單に抽象化して或ひは少くとも個體人格一般として論ぜられる際の人類愛とも明確に區別された人格愛の領域が嚴然と確保されてゐるのである。かの連帶性の原理 *Solidarität* も單にモナド的個體人格が孤立した人格に止どまらないで根源的に自己みづからの神に結ばれる事を知り、愛を以て世界に向ひ精神の世界と人類全體との根源的相互性を感じ取る事を意味してゐるのであつて、人格の連帶性が愛を導びくのではなく逆に個體人格の核心から溢れ出る愛こそが人格の連帶性を引き出すと考へられねばならない。この人格愛こそは有限なる人間的人格存在に對する情緒的意味賦與であり、隠された他我人格の特性を凡べて開示せしめると同時に自己の人格を相手に與へるのである。かゝる對愛 *Gegenliebe* に於てこそスタンダールの言ふ如く千變萬化な人間の具體的道德關係は離如と展開されてくるのである。

かくシェーラーに於ける愛とは同情でも單に生命、*Leben* に於ける人間相互の融合としての一體感 *Einsfühlung* でも當然なくして、個體人格が自からを否定する事によつて反つて眞實の意味で自からの人格たらんとする辯證法的な人間存在の情緒的志向表現なのである。こゝにジンメルの強調する愛に於ける犠牲の演ずる役割が新しく蘇がへつて來ると言ひうるのではなからうか。

最後にシェーラーの人格愛はハルトマンのそれの如く^註現實の背後に絶えずひそむアプリアリな人格の叡知的性格としての理念像を豫想しそれを目的とする愛なのではなくして、人格のかゝる無限な運動の中に最高の價值は、*Wert* が、現はれてくるのである。それは何處迄も愛の運動の結果導びかれるものであつて決して目的ではないのである。従つて

シェーラーの愛は單純にプラトンのエロースとのみ批評される事は許されないのであらう。

六

シェーラー人格主義の核心を根本的に把握せんが爲に人間の諸種な存在様態を情緒的に分析批判し、人格愛の思想を考察する事によつて個體人格相互の積極的道德關係に足を踏込んだ私は、最後に總體人格 Gesamtperson を問題とする事によつてこの論文の統一的完成を急がねばならない。即ち一方個體人格の具體的存在及び活動が道德の最高理想であると共に社會や歴史の終局目的とも考へられ、他方單に孤立した個體人格はそのまゝではカントの理性人格と同様無意義な抽象人格として拒否され、各々の個體人格は一切の人格の王國全體の道德的福祉に對して根源的に共同責任を擔つてゐるのでなくてはならないと考へられた、この矛盾的とも思へる人格の二重的存在、構造の問題を批判しなくてはならない。

先づ彼はそこで人間社會の基本形態を群集、生命共同體、利益社會、總體人格の四ヶに分類する。^(註1)こゝで批判の對象となる總體人格とは夫々の個體人格が相互の人格性を認めつゝ、或る一定の作用中心に於いて本質必然的に共同體を構成する事によつて確立される自律的で精神的同時にそれ自身個體的な最高の統一體として、人格價值を志向する獨自な社會型態を意味してゐる。故に領域や傳統或ひは血縁や單なる共同目的に基づいた統一體ではないのである。この意味に於いては總體人格がその持續と内質及び作用領域とに於て自己の構成員たる個體人格の存在と體驗を越えてゐるのであると言ひうるが、他方諸人格の統一體は相互に包攝的關係に立ちつゝ幾つか存しうると考へられるので、同一個體人格が同時に違つた總體人格の成員たりうる事は當然であらう。^(註2)即ちそれらは人間の諸種な存在様態の統一的表现として夫々への關はり方を意味してゐると見るべきであらう。かくしてシェーラーは總體人格の具體的實例として、理念的には神の前なる全人格の愛共同體、現實的には教會及び文化圈と國民（兩者は文化總體人格と總稱され

である)との四ヶを掲げてゐるのである。^(註3)

そこでシェーラーは『有限的人格には個體人格と總體人格とが、その世界には併し個體世界と總體世界とが所屬してゐる。二者は人格と世界との具體的全體に於いて本質必然的な兩面である』^(註4)と言つてゐるのである。だが果してこの事は如何にして可能なのであらうか。これが正に問題なのである。彼はこの重大な課題を積極的に解決してゐるとは言へないのであるが、或る一ヶの鍵は提出してゐると言つてよいであらう。即ち、それは如實に働き続ける人格の王國であり、人格の無限な源であり、全人格の愛共同體とも換言されてゐる人格としての神・愛としての神と言ふ思想以外には見出す事が出来ない。^(註5)シェーラーに於て神の愛こそは現象學的根本作用と呼ぶ事が出来るのであつて、こゝに於てのみ個體人格は個體人格として、總體人格は總體人格として各々自己存立の基礎を見出しうるのであり、有限な人間人格の兩面としてのこの個體人格と總體人格との同時的成立こそがシェーラーの企てた新しい人格主義の祕義なのである。彼の言葉に従つてみるならば、個體人格並びに總體人格は共に神の人格を顯現せんが爲に必然共同責任を擔つてゐると言ふ事を意味してゐるのである。

然しこゝで注意すべきは總體人格の成員たる各々の個體人格相互の中には代換交替しえない連帶性の原理が支配してゐるのであるが故に、寧ろ個體人格は全くの個體人格としてその儘で既に總體人格の價值性に就いて積極的責任を有してゐるのである。約言すれば個體人格は自己の個體性に徹する事によつて反つてみづからの個體性と獨自性を成餘す所なく展開する事となるのであつて、只管彼にとつて善なるものを求め遂行する事に於いて逆に總體人格を完成せしめる事となるのである。^(註6)正に諸人格の單に存在する事、及びそれが出来る丈完全に善くある事に於いて、更にそれら個體人格の最も豊富な充實と最も完全な展開に於いて、それからそれらの人格の最も純粋な美と内的調和とに於いて總體人格は測定せられ全宇宙の終局的意義と價值が発見されるのである。かの總體人格の實在性も所詮かゝる個體人格の徹底を缺く時必然空虚な無に歸する外ないのである。これがシェーラー人格主義の根底を流れる個體人格説

の重要な意味なのである。

かくしてシェーラー人格主義の最も困難なアポリアを救ふ或る種の飛躍は繰返す如く個體人格の愛でなくてはならない。かゝる人間人格の全體的存在様態の統一的表现としての情緒的志向運動たる人格愛に於いてこそ、他我人格は開示せられ同時に自己の人格を相手に與へ、かくして總體人格の完成を高らかに樹立せしめ、愛の秩序の統一者愛のピラミッドの尖端としての神に連なる事に於いてシェーラーの倫理的人格主義は華麗な完成をみるのである。唯この愛の秩序を混亂に陥れる謀叛者としてバリカイ主義、憤慨、Resentment、憎の三者が論述されてはゐるが、それは一時的病的な非本來的姿としてやがては愛の秩序に解消されてしまふとシェーラーは信じてゐた様である。

だが彼の如く個體人格が單に神の中に止どまるのでは樂天的安易さと妥協とは蔽ふべくもない。^{註(1)}そこには佛教が深遠に説く如く覺者は不住所涅槃たるべきであり、愛の王國に深くも連なる自己を自覺した個體人格は各、やがては還相的に現實の歴史的社會の中で生き生きと生活し続け、愛の理想の體現と完成に精進するの^{註(2)}でなければ無意義である。個體人格もこゝに於いて始めて最も豊富な充實と完全な展開、最も純粹な美と內的調和とを有しうるのであつて、これこそ愛の道德論の極致なのではないであらうか。

七

愛とはプラトンがいみじくも説いた如く有限者の結合による無限への永遠なる憧憬であると古來言はれてゐる。シェーラーに於いて考へれば有限なる人間人格が個體人格として自己人格の全體的表現を通して、無限なる人格の人格としての神に至らんとする情緒的存在の志向的統一の遂行そのものが愛であると言ふ事が出來よう。愛は單に有限者と無限者現象と本質とを矛盾するが故に結びつける或る力でも、スピノザに於ける知的神の愛の如く絶對者の中に人間人格が解消してしまふのでも決してない。十全な意義で愛の祕義とは何處迄も絶對に結びつきうる筈の無い個體人

格と個體人格とを直接結びつけ、そこに新しい全く唯一獨自な生命を創造する事によつて常に新しい個體人格となる人間人格の情緒的全體運動でなくてはならない。それ故に個體人格の他我人格に對する人格愛こそ私はシェーラーと共に絶對愛と呼ぶ事ができるのであつて、愛の秩序の具體的完遂者は愛の王國に深くも足を踏込んだ個體人格であると結論してよいであらう。この意味に於て人間の人格とは優れて愛であると結論しうるのである。人間は正に *ens cogitans* 或ひは *ens volens* である前に *ens amans* なのである。

故にプラトンの指摘したエロースの辯證法的構造の眞の展開は單に形而上學的世界に於いて求めらるべくもなく、社會的價值體驗を直接行證する人格の自己否定即自己肯定的決斷に於いて、新しく復活を求める創造運動として的人格愛に於いてのみ絶對的完成をみると言はねばならず、現象學的本質及び價值もその中に初めて生まれてくるのである。愛に於いてのみ正に時間と永遠との觸れ合ふ眞の瞬間がある。有限なる人間はかくて愛に於いてのみ永遠をみ永遠を味はひうるのであつて、永遠と時間との絶對的統一を自から證し理想即現實、現實即理想の大いなるダイヤレクチークを完遂するものこそ個體人格の人格愛そのものでなくてはならない。

(一)

(附 註)

—

- 註(1) Max Scheler: *Formalismus in der Ethik und die materiale Werthelehre*. 3. Aufl. 1927 S. Vorwort zur zweiten Auflage
- 註(2) M. Scheler: *Vom Ewigen im Menschen*. I Bd. 66 od. 105~8
- 註(3) M. Scheler: a. a. o. S. 66 od. 105 ff.
- 註(4) I. Kant: *Kritik der reinen Vernunft*.
〃 : *Kritik der praktischen Vernunft*.
- 註(5) A. Meinong: *Psychologisch-ethische Untersuchungen zur Werththeorie*.
C. v. Ehrenfels: *System der Werththeorie*.

- 註(2) Hans Cornelius: Einleitung in die Philosophie.
Felix Krüger: Der Begriff des absolut Wertvollen.

II

- 註(1) M. Scheler: Formalismus usw. S. 59 ff.
 〃 : Schriften aus dem Nachlaß S. 244 ff.
註(2) F. Brentano: Vom Ursprung der sittlichen Erkenntnis. S. 17 ff.
 〃 : Psychologie vom empirischen Standpunkt II Bd. S. 88~9.
註(3) M. Scheler: Formalismus usw. S. 394 ff.
註(4) 〃 : Wesen und Formen der Sympathie. S. 112 ff.

III

- 註(1) M. Scheler: Formalismus usw. S. 268ff.
註(2) A. Nygren: Eros und Agape S. 58ff.
註(3) M. Scheler: Wesen und Formen der Sympathie. S. 194ff.
 「愛の形を以て vitale od. Leidenschaftsliche, seelische Liebe des Ichindividualitums, geistige Liebe der Personの三者を區別した。ロマンチックの形を無視して愛一般をのみ考察したが故に愛の深い意味を看過したのである。」
註(4) M. Scheler: a. a. o. S. 163~8
註(5) 〃 : a. a. o. S. 177
註(6) 〃 : Schriften aus dem Nachlaß S. 251~5
註(7) Pfänder : Zur Psychologie der Gesinnungen (Jahrbuch für Philosophie I, I) S. 337ff
註(8) G. W. Hegel: Grundlinien der Philosophie des Rechts. S. § 158.
註(9) G. Krenzlin: Max Scheler's phänomenologische Systematik S. 29.
註(10) M. Scheler: Formalismus usw. S. 269.

四

- 註(1) M. Scheler : Formalismus usw., S. 397ff. od. 144~6
 註(2) " : a. a. o. S. 388
 註(3) " : a. a. o. S. 408~13
 註(4) N. Hartmann : Ethik S. 211
 註(5) M. Scheler : Die Stellung des Menschen im Kosmos, 45ff.
 註(6) 和辻哲郎・人格と人類性 S. 98.
 註(7) M. Scheler : Schriften aus dem Nachlaß S. 250ff.

五

- 註(1) M. Scheler : Wesen und Formen der Sympathie, S. 187ff.
 註(2) N. Hartmann : Ethik S. 484ff.

六

- 註(1) M. Scheler : Formalismus usw., S. 547~56
 " : Schriften aus dem Nachlaß S. 160ff.
 註(2) " : Formalismus usw., S. 543 od. 555
 註(3) " : a. a. o. S. 568.
 註(4) " : a. a. o. S. 543.
 註(5) " : a. a. o. S. 411
 G. Kranzlin : Max Scheler's phänomenologische Systematik S. 38ff.
 註(6) M. Scheler : Formalismus usw., S. 555ff.
 註(7) " : ordo amoris (Schriften aus dem Nachlaß)

only opposite to God's necessity but also to man's freedom.

Man's freedom, as a dynamic unity of necessity and freedom, is the apex of God's creation, and decides what form of unity is to be achieved. In other words, by this decision, phases of the relationship between God's freedom and the world are determined.

* For the Japanese original of the article, see Vol. XXXVI, No.3 & 4.

On the Structure of the Emotional Essence of a Person in the Philosophy of M. Scheler

By Shyôzô Fukatani

In this essay I have tried to discuss the problems raised by Scheler in his theory and system of value, which he asserted to be 'material' and 'apriori' by criticizing his conception of the intentionality of love and his peculiar conception of a person; thus I wanted to clarify the original and basic character of human existence.

In the philosophy of Scheler it is nothing but the intentionality of love that serves as a bridge for reaching the kingdom of values. His love is neither sympathy nor a feeling of unity (*Einsfühlung*), but an intentional emotion; and as such it is an important faculty for the cognition of values. Now what Scheler calls a person is not the ego of the transcendental apperception nor a psychological ego, but a unity of intentional actions; such a person is a complete individual only in the execution of intentional actions. In other words, we may say that a person is a phenomenal unity-form of intentional acts, while love is a phenomenal unifying band of persons.

He introduces further the conception of a general person (*Gesamtperson*) as the principle of solidarity. This, according to him, is the highest form of society as a personal unity of individual persons. But such a society is made possible only by the spontaneous, mutual love of human

persons (Gegenliebe).

In what he calls „the order of love“ as a result of such a love, i.e. in the concrete realization of personal values, human beings become truly individual persons. Consequently, the realization of all other values is likewise perfected here. Therefore, Scheler teaches, we ought to fight against all hatred, resentment and pharisaism that would jeopardize „the order of love“.